

トピックス
1. 秋刀魚にすだち
2. 南国土佐を後にして 高知編



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留 章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 57
	2022年9月号

白露～秋分の候 「秋刀魚にすだち」

播州では盆を過ぎた18日に大雨があり、それまでの酷暑も流石に和らいで空気が秋色にか変わった。日中の陽光は鋭く残暑は厳しいが、朝夕に吹く風は少しだけ冷気を含んでいる。盆を過ぎるころには、それまでのミンミンゼミやクマゼミの蟬時雨が止んで、入れ替わりにツクツクボウシの登場。凡人の私にはツクツクボウシと思い込んで聞いているので、そうとしか聞こえない。昔の人は「筑紫恋し、筑紫恋し」と聞いたらしい。旅の途中亡くなった人の魂が、蟬になって故郷の筑紫恋し、筑紫恋しと泣くのだという伝説もある。なるほど



そうとも聞こえる。全国的にいろいろな説があるようだが、こればかりはそれぞれの人が心で翻訳する以外にない。そう言えば、真打の蝸（ひぐらし）の声を聴かなくなって久しい。明け方や夕方に「カナ カナ カナ」と夏の終わりを告げる寂しげな声に心打たれる人も多い。昼間のセミたちの出番が終わるころ、重なるようにして秋の虫たちが登場する。マツムシ（チンチロ チンチロ）鈴虫（リンリン リンリン）コウロギ（キリキリキリ）クツワムシ（ガチャガチャ）ウマオイ（チョンチョンスイチョン）～童謡「虫の声」より～これを聞き分ければ、りっぱな虫博士である。

秋の魚といえば秋刀魚（きんま）。ここ数年記録的な不漁が続いている。スーパーの店頭に並び始めたが、一尾200円と高値だし形も小さい。秋刀魚も高級魚に変身だ。魚体の中心に包丁で一直線に切れ目を入れる。新鮮なものは実がはじけるように盛り上がる。欠かせないのが大根おろしとすだち。すだちは柚子の近縁種。漢字で書くと「酢橘」。まろやかな酸味と爽やかな風味は特に焼き魚との相性がよい。

大吟醸の冷酒に秋刀魚の塩焼き、完璧な季節感で他を圧倒する。少々高いが、今夜も秋刀魚とするか。

残暑が続きます、コロナと熱中症には気を付けて、ご自愛ください。

立秋 9月8日頃

処暑 9月23日頃

随筆 『龍馬と私』 ～龍馬に学ぶ 複眼で物を見続けた龍馬～

現代でもそうだが、日本人の多くはあくまでもAかBという二極対立思考を好む。龍馬の行動を見れば、物事を推し進めるのはAでもなければBでもない、第三の道の発見を目指した。そしてあらゆることにおいて、その第三の道を探り当て、実行し、そして効果を上げた。これはあくまでも龍馬の柔軟な思考と行動力による。

「大政奉還がだめなら、武力討幕もあるさ」

「幕政改革がだめなら、新政体もあるさ」



というように総体的に政治をスポーツとさえみるような、自信に満ちた余裕の中で物事を推し進めていった。実際に大政奉還を推進しながら薩長同盟を成立させ武力討幕を推し進めたりした。反幕雄藩（薩摩や長州）と密接に交流しながら、幕府の重臣とも密接にコミットしている。勝海舟や松平春嶽。龍馬の思想や行動は当時の日本人から見れば常識の枠を大きく外れており、とても理解できるものではなかった。もちろんそれが龍馬暗殺の背景にあったことは想像に難くない。

龍馬はしかしそれを恐れなかった。自分が見つけた第三の道信じそれを貫き通すことに一生をかけた。士農工商の身分制度が色濃く残る幕末において、武士から最も卑しいと言われた「射利 投機（金儲け）」を経済の基本とらえ、海援隊の創設によって、古い思想を打破した。龍馬がのちに岩倉具視に「私は政府高官にならず、世界の海援隊をやりたい」と言ったのは、彼の本音であり決して負け惜しみのような、冗談のようなものではなかった。世界に雄飛することが彼の夢であり、交易を通じて世界と交流することが最大の目標であった。その発想の源には彼の生家が大商人であったことが大きく影響していると思う。また長崎でのグラバーや小曾根英四朗や大浦慶など貿易商人との交流も忘れてはならない。幕府は長く重農主義を踏襲してきたが龍馬はこれを捨て重商主義を取り入れるという政策転換が彼の行動目標だった。龍馬の心の奥には不当に虐げられているものに対する同情とその開放意欲があった。龍馬の重商主義を要約すれば「誇りをもって金を儲ける」という商業哲学であった。

参考文献「坂本龍馬に学ぶ」童門冬二著 新人物文庫

播州日誌



持続可能ということ

寓話をひとつ。^{つかはらぼくでん}塚原卜伝と弟子の会話。入門を許された弟子「一生懸命修行いたします。そうしますと何年くらいで免許皆伝を頂けるでしょうか」卜伝弟子に答えて「そうだなお前は剣の筋はよいから 5 年ぐらいかな」弟子は不満だった

のか「では寝食を忘れて修行します。それだと何年・・・」「10 年かかる」弟子は驚き話があべこべだと重ねて問う「私はもう死に物狂いで修業します。そうすれば何年・・・」

卜伝は弟子にこう伝える「おいおいお前、死に物狂いでやれば、一生かかっても免許皆伝とはならぬぞ」卜伝は何を言いたかったのだろう。続けることが何よりも大事であり、無理をすれば続けることができないということ。中道の精神、すなわち、その人なりの「良い加減」で続けることの大切さを説いている。「継続は力なり」とは古くから言い慣らされているが、真に継続することが成功のカギとなるのである。誤解を承知で言うならば、この寓話は良い加減の勧めであり、それは「緊張と緩和」のさじ加減が重要だということだ。紀元前の学者ヘロドトスは「歴史」という書物の中で、エジプト第 26 王朝のアマシス王のエピソードを紹介している。「弓を所持するものは、これを用いるときは引き絞るが使い終われば緩めておくもの」「いつも張ったままにしておけば折れてしまい、肝心な時に役に立たない。人間の在り方もこれと同じことじゃ」

適度な強さで張り、時々は緩める。これが正しい道である。



SDGSは「持続可能な開発目標」と訳されます。17の目標（ゴール）と169のターゲット（解決すべき課題）は、経済・社会・環境の3要素の調和を掲げています。この目を見張るような壮大な目標設定に、ややもすれば目がくらみそうです。あまり難しく考えるのではなく、個人的に見て何か一つでも、やってみようかというものがあれば挑戦すればよいのです。そしてそれを社会的な、国際的な動きにつなげていけばよいのです。17の目標はいずれもはるかに遠く高い所にあります。しかし崇高な目標に向かって前進する私たちの力は微力ではあっても無力ではないと思います。

2022. 8. 28

～南国土佐を後にして～

第2回 「高知編」 中沢先生

クリーニング店の朝は早い。姉、兄たちには、皆それぞれの担当が決められていた。誰1人文句を言う者はいなかった。そんな時代だった。洗いのボイラーに点火しお湯を沸かす者、アイロン台横にある小型ボイラーにお湯を入れる者、湿しこみといって半乾きになったYシャツなどをかごに入れて足で踏みつける者。小学生といえどもいろいろと手伝われる。クイックといって、旅館などに宿泊した人のYシャツやズボンなど、前日にあずかり洗濯をして、翌朝早いうちに自転車でその旅館に届ける仕事。季節の良いときはそうでもないが、寒い朝などは手がちぎれるようでつらかった。

クイックは大した金額にはならなかったが「特急仕上げ」といって、クリーニング屋の大事なサービスの一つであった。忘れられないのは早朝に、家族みんなの「うどん」を買ってくるように言われ、買ったうどんを前かごに入れて帰る途中、バランスをくずして自転車ごと転倒、白いうどんに石ころやごみが混ざることになってしまった。家族中の怒りが爆発して、泣くにも泣けず、笑うに笑えず。この朝のことは一生忘れないだろうと思う。

この頃の経済状況は、詳しくはわからないけれど、自転車屋からクリーニング屋への鞍替えは割合うまくいったようだ。父は雑学の人で器用な人でもあった。年々暮らしがよくなっていったようだ。それはそうだろう、家族が協力して人件費はほとんどいらなかったのだから、薄利多売でもなんとか儲かっていたのだろう。

力を得た父は、高知のクリーニング屋の中で1番に自転車からスクーターに乗り換え、みんながスクーターを配達・集荷に使うようになる頃には、ダイハツのミゼット（小型三輪車）に乗り換えた。映画館のスポット広告を出したり、店頭には映画館のピラ下広告の看板を置いたりした。映画館からは毎月何枚かの招待券が手に入り、客や家族にくばったりして喜ばれた。5年後ぐらいには、高知きってのクリーニング店「神戸屋」になった。

3年生から6年生の3年数か月は、両親や姉や兄のおかげで、それほど困ることもなく、貧しかったが明るく楽しい日々であったと思う。当時の先生方は、教育熱心で子供達の面倒をよく見ていたと思う。5年、6年の担任だった中沢先生もその一人で、厳しくも暖かく、大好きな先生だった。数少ない集合写真の中で1枚だけ大切にしている写真がある。屋上でクラス全員が先生を中心に笑顔で撮った写真。ちゃっかりと先生のすぐ横で肩を抱いてもらっている。着ているセーターの胸にはAのイニシャル。母が手編みで編んでくれたものだ。まさに少年Aなのだ。



そんな先生が一度だけ、私たちが教室に座らせたまま、廊下で〇〇君を激しくしかりつけ、投げ飛ばしたりした。その音が教室にいる私たちの耳に遠慮なく入ってくる。何度も何度も投げ飛ばし投げつけ。級長である私は教室の窓からそっと外をうかがった。厳しい顔して先生は「なんでや、なんでそんなことしたんや」「言うてみ、言うてみんかえ」その先生の目には涙がいっぱいだった。何があったのかは未だにわからない。先生の泣きながら叱る声や、ドスドスンという音は今でも耳に焼き付いている。今なら新聞沙汰どころか懲戒免職になってしまっただろう。

コピー機もない時代。印刷はもっぱら謄写版。先生は私たちへの宿題をプリントすることに放課後の時間を費やしていた。先生の薄いグレーのジャンパーはインクの色でいつも真っ青だった。そんな先生の姿が今でも私の心に大きな印象となって残っている。一時期、学校の先生を夢見たことがあったが、間違いなく「中沢先生」のような先生になりたかったのだと思う。

周りの友達から、神戸から来たから「神戸屋」とよく言われたが、もともと神戸屋という屋号だった。神戸屋は市電の棧橋通1丁目の停留所のすぐ前にあった。別名「帯田」という呼び方も残っていた。高校野球の強豪高知商業が、道を挟んで並びにあった。ほんとに偶にはあったが、ファールボールがバックネットをこえて、我が家に落下した。市電の停留場の前だから人通りはあった。朝の出勤時、夕方の退勤時はかなりの乗降客があった。まだまだ自家用車の普及は程遠い頃で、所有する人はかなり限られていた。父は器用な人でしかも明朗な人であった。またアイデアマンでもあった。ウナギの季節になると、どこからか生のウナギを仕入れて来て、退勤の時間に合わせて店頭でそのウナギを捌くのである。当時は娯楽も少ない時代、物珍しいこともあって、結構な人ばかり。まな板にくねくねと暴れるウナギを乗せて、目のあたりに目打ち（千枚通し）をさし、細身の包丁で、関西風に腹開きを決める。サツとうまく捌けたときにはちょっとした歓声上がる。そしてぴくぴくと動くウナギの心臓を盃の酒に浮かべて客にふるまう。「おんちゃん、こじゃんと精がつくぜよ。かわりに洗濯もん、もってきてよ」と宣伝する。子供心に恥ずかしく遠くから見ていた。おかげで連日連夜ウナギが食卓に上がり家族は閉口していた。ウナギもそのころはかなり安価だったのだろう。余裕が出てきたのか、次々と小動物を店頭で置きたした。犬、軍鶏（シャモ）チャボ（観賞用鶏）目白（めじろ）など、時間によっては5～6人の見物客で店頭が賑わった。当然その世話は子供たちの仕事であった。極め付きは「猿」である。学校から帰ると、父が長火鉢の前に座って晩酌をしていた。丹前の襟のところに何かいると思ったら、これがポケットモンキー。「どうした」



と聞いたら、昼間猿回しが来て、病気の猿の面倒が見れないから買ってくれと言われて、なにがしかの金で買ったという。下痢をしていたらしいが、近くの犬猫病院で治療して治ったという。家の中を走り回る猿に私は閉口したが父は平気。翌日から店の前の歩道の街路樹（クスノキ）に長い鎖につながれた猿が道行く人の耳目を集めた。とにかくTVもない時代であるから1日中人だかりがしていた。それも恥ずかしい思いであったが、父は平気の平左、みんなの喜ぶ顔が見れて、宣伝にもなると喜んでた。



傷病手当金の届出について ～ 傷病手当金を申請する際のポイントをお知らせします ～

- ① 仕事とは関係のない病気やケガの療養のための休業であること
- ② それまで就いていた仕事に就くことができないこと
- ③ 4日以上仕事に就けなかったこと（待期3日間は有給処理でも可）
- ④ 休業した期間について給与の支払いがないこと

ご不明の際は、お問い合わせください♪♪

